

岡本綺堂・作 「白髪鬼」より抜粋

しかし今夜もまだ九時ごろです、表には電車の往来するひびきが絶えずごうごうと聞えています。下では鰻を焼く団扇の音がぱたと聞えます。思いなしか、頭の上の電燈が薄暗くみえても、床の間に生けてある茶の花の白い影がわびしく見えても、怪談らしい気分を深めるにはまだ不十分でした。もちろん山岸はそんなことに頓着する筈もない、ただ自分の言いたいだけの事を言えばいいのでしょう。やがて又向き直って話しつつづけました。

「自分の口から言うのも何だが、わたしはこれまでに相当の勉強もしたつもりで、弁護士試験ぐらいはまず無事にパスするという自信を持っていたんですよ。うぬぼれかも知れないが、自分ではそう信じていたんです。」

「そりゃそうです。」と、私はすぐに言いました。「あなたのような人がパスしないという筈はないんですから。」

「ところが、いけないからおかしい。」と、山岸はさびしく笑いました。「君も御承知だろうが、ことしで四回つづけて見事に失敗している。自分でも少し不思議に思っくらいで……。」
「私もまったく不思議に思っているんです。どういうわけでしょう。」

「そのわけは……。今も言う通り、わたしは幽霊に責められているんですよ。いや、実はかばかしい。われながら馬鹿げ切っていると思うのだが、それが事実であるからどうにも仕様がなない。今まで誰にも話したことはないが、わたしが初めて試験を受けに出て、一生懸命に答案を書いていると、一人の女のすがたが私の目の前にぼんやりと現われたんです。場所が場所だから、女なぞが出て来るはずがない。それは瘦形で背の高い、髪の毛の白い女で、着物は何を着ているかはつきりと判らないが、顔だけはよく見えるんです。髪の毛の白いのを見ると、老人かと思われるが、その顔は色白の細おもてで、まだ三十を越したか越さないか位にも見える。そういう次第で、年ごろの鑑定は付かないが、髪の毛の真っ白であるだけは間違いない。その女がわたしの机の前に立って、わたしの書いている紙の上を覗き込むように

じっと眺めていると、不思議にわたしの筆の運びがにぶくなって、頭もなんだか茫として、何を書いているのか自分にも判らなくなって来る……。君はその女をなんだと思います。「しかし……。」「と、わたしは考えながら言いました。「試験場には大勢の受験者が机をならべているでしょう。しかも昼間でしよう。」

「そうです、そうです。」と、山岸はうなずきました。「まっ昼間で、硝子窓の外には明るい日が照っている。試験場には大勢の人間がならんでいる。そこへ髪の毛の白い女の姿があらわれるんですよ。勿論、他の人には見えならしい。わたしの隣りにいる人も平気で答案を書きつづけているんです。なにしろ、私はその女に邪魔をされて、結局なんだか判らないような答案を提出することになる。何がなんだか滅茶苦茶で、自分にも訳が判らないようなものを書いて出すのだから、試験官が明き盲でない限り、そんな答案に対して及第点をあたえてくれる筈がない。それで第一回の受験は見ごとに失敗してしまった。それでも私はそれほど悲観しませんでした。元来がのん気な人間に生れ付いているのと、もう一つには、幸い

に郷里の方が相当に暮らしているのです、一年や二年は遊んでいても困ることはないという安心があったからでした。」

「そこで、あなたはその女に就いてどう考えておいでになったんです。」

「それは神経衰弱の結果だと見ていました。」と、山岸は答えました。「幾らのん気な人間でも、試験前には勉強する。殊にその当時は学校を出てから間もないので、毎晩二時三時ごろまでも勉強していたから、神経衰弱の結果、そういう一種の幻覚を生じたものだろうと判断しました。したがって、さのみ不思議とも思いませんでした。」

「その女はそれぎり姿を見せませんでしたか。」と、わたしは追いかけるように訊いた。

2005年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ポフンティアの皆さんが尽力をなされています。